

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	渡邊 大作	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	円枠家族描画法の母子イメージにおける対象関係
------	------------------------

本文概要

問題と目的 Gillespie (1989) は、「お母さんと子どもを描いてください」と教示する「母子画」という描画法を創案し、描画者の自己と重要な他者との関係を表象すると述べている。また Burns (1990) は「円枠家族描画法」を開発し、円枠の中に家族を描き、周囲にシンボルを描くことで「投影的な素材が増大する」と述べている。本論では円枠家族描画法の技法を用いた母子イメージの描画が、対象関係の様相によってどのように表現されるのか、量的および事例的な観点から検討することを目的とする。

第1研究方法 第1研究では量的観点から、描画指標やPDI (Post Drawing Interview) が青年期用対象関係尺度 (井梅ら, 2006) の得点パターン (クラスター) ごとにどのように表現されるのか検討する。調査対象者は大学生および大学院生 121 名から欠損を除いた 111 名 (男性 35 名, 女性 75 名, 未記入 1 名, $M=21.2$, $SD=3.94$) であった。母子を対象にした円枠家族描画法の描画と、質問紙, PDI シート, フェイスシートへの記入を集団式調査によって実施した。

結果と考察 青年期用対象関係尺度の回答に階層型クラスター分析 (ward 法) を行った結果, 4 つの群に分かれた。その後, 一要因の分散分析と多重比較 (Bonferroni 法) を行い, 各群を「親和不全・対人関係撤退群」, 「希薄な対人関係群」, 「安定群」, 「過剰な他者希求群」と命名した。各群と描画指標と PDI 指標とで χ^2 検定及び Fisher の直接確率検定を実施し, 有意な出現頻度の違い ($p<.05$) と有意な傾向 ($p<.10$) が見られた項目には残差分析を実施した。「親和不全・対人関係撤退群」では抱き合う母子像の出現頻度が高かった。「希薄な対人関係群」では不自然な切断や表情の省略など「身体欠損」のある母子像の出現頻度が高かった。「安定群」では分離する母子像の出現頻度が低く, 手をつなぐ母子像の出現が有意な傾向で高かった。またアイコンタクトのある母子像や PDI での共感のある記述の出現頻度は高かった。「過剰な他者希求群」では身体欠損の出現頻度は低く, また生物のシンボルが描かれやすい結果となった。以上のことから, アイコンタクトや気持ちの共感といった相互交流的なイメージが安定的な対象関係の指標となっていることが推察された。

第2研究方法 第2研究では円枠家族描画法の母子表現における事例研究を行い, 描画への語りからどのように対象関係が投影されるのか概観した。併せて本描画法の特徴や臨床的意義を検討した。大学生 7 名 (男性 5 名, 女性 2 名, $M=19.6$, $SD=0.49$) に個別調査の形式で描画と半構造化面接での PDI を行った。

結果と考察 第2研究では半構造化面接において, 母子の場面や考えていること, 将来どうなるかなどの語りから, 描き手の内的な母子の体験に基づく説明がなされ, 母子間での葛藤や母親から分離することへの不安などが描画や PDI によって表現された。またシンボルについて語ることで, 母子の場面や感情, 描き手自身の現実的な状況について連想したことが示され, 母子像の周囲のシンボルについて, 1 つひとつに描き手がどのような意味を込めて描いたのか説明してもらうことで, 母子の関係性やおかれている場面について, 描き手の取り込んでいる母子のイメージを投影し補足していることが推察された。

総合考察 第1研究における「安定」や「共感」といった定義が, 第2研究においては「自立を果たした安定」, 「コントロール下にある安定」など, 様々な意味であることが示されたように, 量的研究において尺度の得点パターンに特徴づけられる描画や PDI の指標は, 事例的研究によって描画を共有することでさらに意味を持つことが理解された。加えて本描画法は, 枠やシンボルといった様々な投影的材料から自由に場面設定を行い, 描き手の対象関係の理解に役立つ描画となりうることを推察された。